

記録保存版

令和六年瓠堂忌 総集版

先師安岡正篤先生没後四十一年



日時 令和六年十二月二十一日
場所 四条畷神社・神社会館

令和六年 瓠堂忌 (安岡正篤先生を偲ぶ会)

瓠堂忌 次第 (第一・二部)

第一部 正式参拝 四條畷神社 本殿

神事

玉串奉納 安岡定子、竹中栄二、原一洋

第一部 式典 四條畷神社 神社会館

国歌斉唱

開会の挨拶

竹中 栄二 (令和人間塾)

献詠

田中 昭夫 (姫路師友会)

第二部 講演 四條畷神社 神社会館

第一題 原 一洋 (尋牛会)

「安岡正篤先生と瓠堂忌」

小休止

第二題 安岡定子

(公財 郷学研修所・安岡正篤記念館)

「これからの安岡教学と郷学振興」

師友会会歌 「日本の誓い」 斉唱

謝辞 三木英一 (令和人間塾)



四條畷神社・有源招魂社 正式参拜



「瓠堂忌 献 詠」

田中 昭夫(姫路師友会会長)

修学 夢窓疎石作

一日の學問 千載の寶

百年の富貴 一朝の塵

一書の恩徳 萬玉に勝る

一言の教訓 重きこと千金



第一部・二部 司会進行
辻田 充司氏



令和六年 瓠堂忌 式典・講演会 ②

第一講 原 一洋氏（尋牛會代表）



第二講 安岡定子氏（郷学研修所・

安岡正篤記念館理事長）



令和六年 瓠堂忌 講演

原一洋（尋牛会代表）

「安岡正篤先生と瓠堂忌」

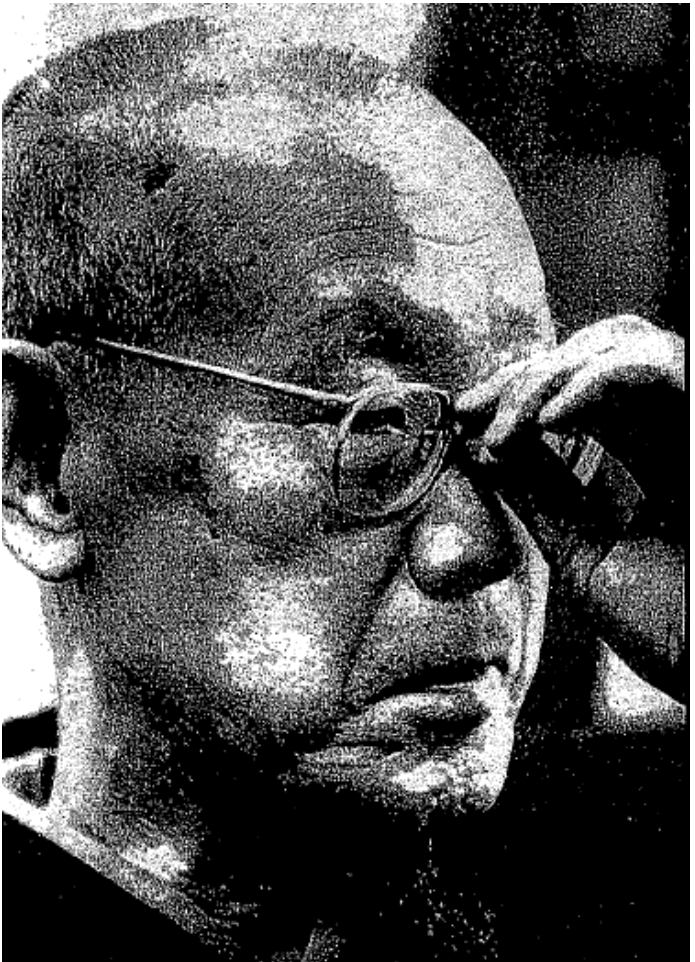


一九八三年十二月十三日 大阪住友病院にて逝去
翌日、全国紙には、

「巨星墜つ！」

歴代総理の指南番 安岡正篤氏逝去」

と報じられた。



晩年の安岡先生

二〇二四年十二月十三日は、歿後四十一年です。

令和六年 瓠堂忌 講演

安岡定子 (公益財団法人郷学研修所)


安岡正篤記念館理事長)

「これからの安岡教学と郷学振興」



わが祖父の思い出
安岡定子

素顔の
安岡正篤



戦前・戦後の政財界に多大な影響力を持ち、多くの人に畏敬の念で見られていた安岡正篤氏。いつも傍にいて、「おぢいちゃん」と慕っていた着者が、偉大な祖父の普段着姿を絶妙な筆致で綴る。

P 江戸 研究所
定価 三、〇〇円

謝辞 (第一部・二部総括)

三木英一氏

(前全国木鶏クラブ代表世話人会会長)



参拝・式典・講演会
全体総括と謝辞
三木英一先生
(令和人間塾顧問)



会場内全景



四條畷神社 神社会館からの眺望



安岡先生旧宅西隣家
福井雅章氏の御話



元関西師友協会副会長
木下博夫氏による乾杯



開宴の挨拶 安岡正守副理事長
(郷学研修所・安岡正篤記念館)

八幡師友会の流れを汲む尋牛会の皆さん
と 原一洋代表による “弥栄！”



安岡先生旧宅 保持者
谷口 明氏の御話



令和六年 瓠堂忌 懇親会
石切温泉 ホテルセイリユウ 於

令和六年 瓢堂忌

師友会会歌 「日本の誓い」

安岡正篤先生の大予言

一、人巧天を驚かし ルーニク日を廻れども

じんこうてん おどろ ひ めぐ
ちじょう なや ふか ひと はめつ

地上は悩みいや深く 人は破滅におののけり (ソ連)

二、人類の罪贖うと 血をそそぎたる十字架の

じんるい つみあがな ち じゅうじか
ひかり よも つた き きりすときょうといま

光を四方に伝え来し 基督教徒今いかに (西欧)

三、無尽の煩惱明らめて無辺の衆生を救はんと

むじん ぼんのうあき むへん しゅじょう すく
むりようほうもんひら しゃかむにぶつごいま

無量法門開きたる 釈迦牟尼仏土今いかに (印度)

四、無為清静の化を愛し 忠恕の道を重んじて

むい せいせい か あい ちゅうじよ みち おも
てんじん とく いつ な こうろう くにいま

天人・徳を一と為す 孔老の国今いかに (中国)

五、アラアを拝しコーランを 奉じて砂漠に奮い立ち

はい ほう さばく ぶる
いつけんてんか ふうび たみいま

一剣天下を風靡せし イスラムの民今いかに (イスラム)

ばんほうごこ めいきゆう ぶんめいつい むな
万邦茲に命窮し 文明終に空しきか

六、嗚呼万世の太平を 開くぞ日本の誓ひなる (日本)

混迷した世界を救えるのは皇国日本である！

「瓠堂」の由来

とは、

要するに「無用の大用」という意味。
瓠堂

『莊子』の逍遙遊篇の中に恵子と莊子との問答がある。

恵子が謂った。魏王から大瓠たいぼくの種をもらって樹いえたところが、よく育って大きい実みがなつた。あんまり大きくて、ものを容れゆるば重くて持ち運びが出来ぬ。剖わいて杓しゃくのようなもの（瓢ひょう）にしようと思つたがただ平たいたくて、ものがはいらぬ。役に立たぬので砕くだいてしまったよ。之を聞いて莊子が曰いつた。君じゃ大きなものが使もちへぬ。宋にひびあかぎれの妙薬めうやくを作る者があつて、真綿まわたんの水さらしを家業にして居ゐつたが、その製法を百両で買つて、之を呉王に売り込んで、呉越の水戦すゐせんに応用して大功を立てた者が居る。

用もちい方次第だ。今君にそんな大瓠があるなら「大樽たいそんにして江湖こくうに浮うぶ」ことを考えりや好このいに、ただ平たいたくて容ゆるれものにならぬなどとは、けちなことだ。君はまだ蓬ほうしん心しん（蓬ほうしんのやうにくねくねした心）があるねー

不肖ふせうは大きいのか小さいのか何なにとか自ら知らぬが誰たれも使もちつてくれぬ。使もちつてもらつても一向世間いこうせけんの役に立ちそうもない。自分で打ち砕くだこうかと考かんへたこともあつたが、江湖こくうに樽そん浮うぶすることを覺おぼえたというわけである。呵か々々」

（江湖尊者）

【出典】『東洋思想研究』昭和十六年三月号

令和六年瓠堂忌

二日目：安岡先生の旧跡を尋ねて（東大阪孔舎衛）



令和6年12月22日（日）

支援：谷口 明氏、福井博章氏

12月22日（日）

孔舎衛界限

安岡正篤先生旧跡めぐり

8:30 ホテルセイリユウ発

8:45 ①孔舎衛小学校

9:30 ②善根寺春日神社

10:30 ③安岡先生旧宅

11:30 ④ビオスの丘
旧跡追加説明
(谷口、福井)

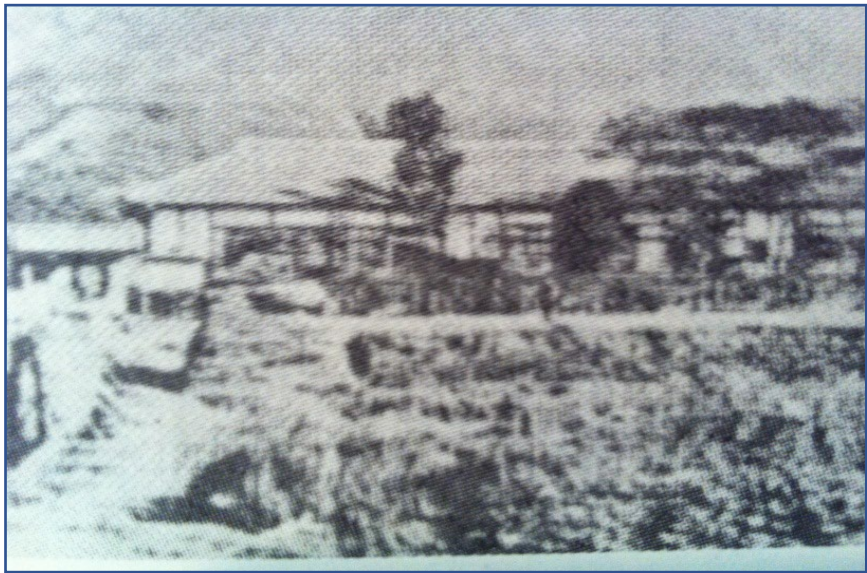
12:00 昼食

13:00 大阪天満宮へ移動

14:00 ④大阪天満宮参拝
正式参拝
見学、説明

15:00 解散

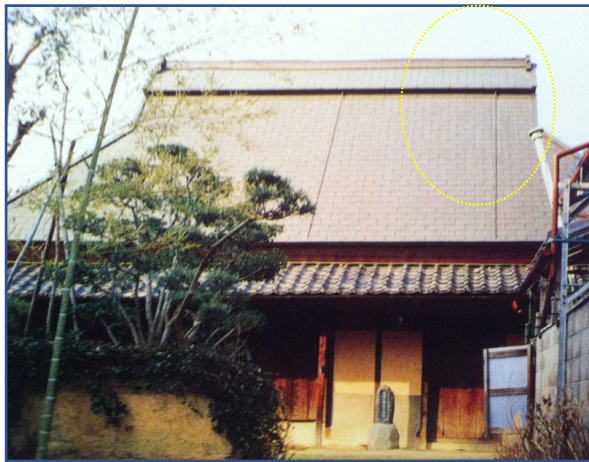




中河内郡日下尋常小学校



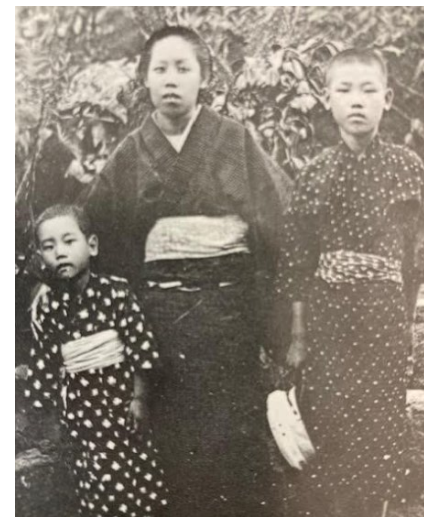
日下尋常小学校では級長



安岡先生旧宅(孔舎衛)



四條畷中学剣道部主将として活躍



令和六年 瓠堂忌
安岡先生と孔舎衛・四條畷

令和六年 瓠堂忌

安岡先生の上京

(大正五年九月)



一高入学前の安岡先生



一高入学当時



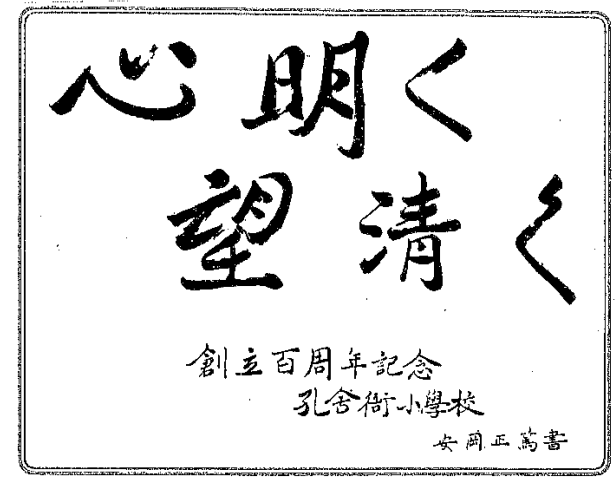
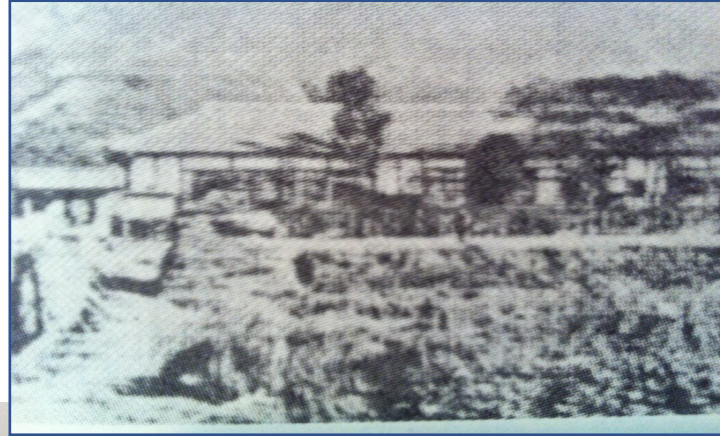
安岡家と養子縁組が整う



日光華嚴の滝を背に

和漢洋の書物を読破し、自身の精神的枯渇を癒すものは東洋古典しかないと看破し、人物学研究に傾倒していった。

1. 孔舎衛小学校 (安岡先生句碑)



創立100周年記念碑揮毫 安岡正篤氏



明治40年度卒業

堀田 正篤	中川 平吉	中川弥太郎	西川政五郎	向井豊三郎	浜口 捨松	橋川幾次郎
三澄 鶴吉	石田幾太郎	山本 直三	原 光太郎	稲田 留吉	定井 米吉	中川 久吉
植村 幾栄	保川 ミネ	中井 カネ	向井 茂	大西マサノ	石井 キミ	谷口 シナ
河澄 富士	福井 キヌ	小川 セツ	石橋 セイ	音川 キセ	原 カメ	西川 キヨ
堀 キク	岸沢 ハズ	田中 シゲ	小林 カル	石田 ナカ	大西 トミ	川上 トメ
川上 テイ	向井 幾	橋本 由松	大西孝太郎	石橋 捨松	浅田米三郎	

明治41, 42年度卒業はなし

孔舎衛小学校創立百周年記念挨拶
卒業生 安岡正篤

昭和四十九年四月二十九日



安岡正篤先生の句碑
と二宮尊徳像



二日目から参加 大山重俊さん、松倉金吾さん



孔舎衙小学校 金治教頭先生対応
令和六年孔舎衙小学校創立百五十周年

令和六年 瓠堂忌 二日目

孔舎衛小学校創立百周年記念式典 特別講話

安岡正篤先生の紹介文（講演録別紙）

東大阪市立孔舎衛小学校創立百周年

記念講演 特別講師

安岡正篤先生片影（人となり）

当校の創立百年祭の式典に出席のため大変御多忙にもかかわらず東京からお帰りをいただきました。安岡正篤先生の御紹介を致します。

先生は、明治四十一年に本校六年制の第一回を卒業せられまして、四条畷中学（現高校）から、一高・東京帝大を卒業されました。

先生と本校で机をならべて勉強せられたお友達の西川さん達の話を承りますと「先生は非常に成績がよいので、クラスは同じであったが友達という印象より兄という印象が深かった。担任の先生が休まれたり出張されると代講を外の教師でなく生徒の安岡さんに命ぜられるのですが、担任の先生より上手なときもあった」と申しておられます。

四条畷中学（高校）を卒業されたときの成績も抜群で、平均点実に九八点をとられたそうです。この九八点は学科は満点即ち百点であったが、術技を要する体操と図工が八十点であったので九八点の平均点になったということです。この成績は四条畷高校において現在にいたるまで破られておりません。

又第一高等学校時代に早くも数々の論文を発表されましたので、それを読んで感激した人が先生を余程の老大家であると思ひ、先生に面接しようとお宅を訪問して応待にいられた先生に向って「お父上は在宅か」と尋ねるので「いや私とその安岡です」と答えられたので訪問者が驚いたというエピソード等限りありません。

さて大学を卒業せられてから今日までの先生を御紹介申しあげることが、先生が余りにも偉大でありその上御活躍が多方面にわたるため大変むずかしいのでありますが、その一つ二つを御紹介いたしますと、先ず先生は、二十六・七才の青年時代有名な吉田茂総理の舅さんにあたる牧野伸顕さんに敬重され、当時牧野さんは伯爵・宮内大臣をしておられたのでありますが安岡青年から帝王の学を聞くことを大変楽しみにしておられたそうです。そういう関係もあって、吉田総理は安岡先生の書簡について「安岡老先生」と宛名を書かれるので安岡先生は自分より遙かに年上の吉田さんですから、吉田さんに「老」だけは取ってほしいと言われたそうですが、総理曰く「僕のオヤジが先生と言っておったから老先生ですよ」と笑って承知されなかつたそうです。

日本海々戦の勇将で海軍大臣をされた八代六郎という有名な大将がおられました。この人も若い安岡先生に師事され、今次大戦の山本五十六元帥も最後まで先生に師事されました。大阪でも知事や大阪市長が先生の御来阪の度に御招待をしてお話を聞いておりました。戦時中文化大臣就任の懇請もありましたが固辞されて、ひたすら学問の道を歩まれました。

今次大戦の終末にあたって、内閣の懇囑で終戦の詔書の刪修にあられましたことは有名であります。私達日本民族はこの詔書によって破滅から救われ、今日の繁栄を得たと申してよいと思ひます。終戦後も総理大臣の施政方針演説等はよく先生にお目通しを願ったものであります。

昨今も大阪財界その他名流の人々が、先生を迎えて日本や世界の問題についてよく御意見を聞いておられます。

本年は先生七十七才即ち喜寿を迎えられると承ります。益々御壮健で日本の為、教学の為御活躍下さることを祈念いたしますとともに、本日機会にこの郷土にもお遊びいただくようお願い申し上げます。お祈ります。

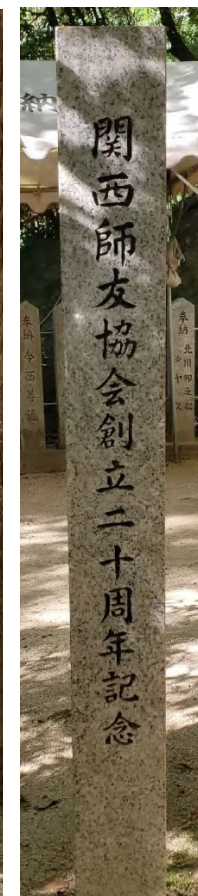
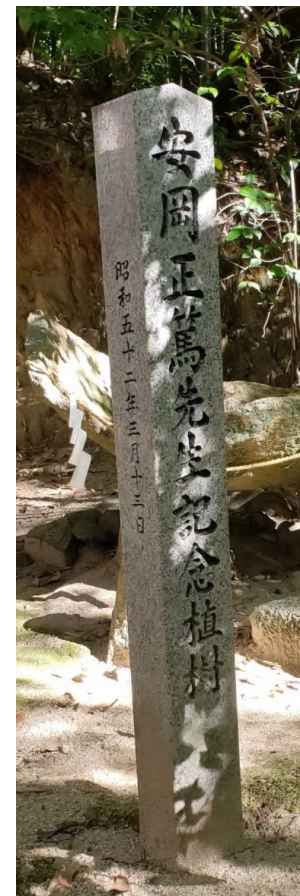
2. 善根寺春日神社 (安岡先生初学処)



善根寺春日神社



善根寺春日神社の御神酒
(安岡先生も飲まれたかも?)



善根寺春日神社境内にある石碑



現宮司・高松 祐吉(ユウキチ)



次代宮司・高松 篤良(トクヲ)



安岡先生も歩いた春日神社の参道 c



善根寺春日神社本殿



現宮司 高松祐吉氏と
安岡正守副理事長



春日神社の
御酒蔵



現宮司 高松祐吉氏のお母様

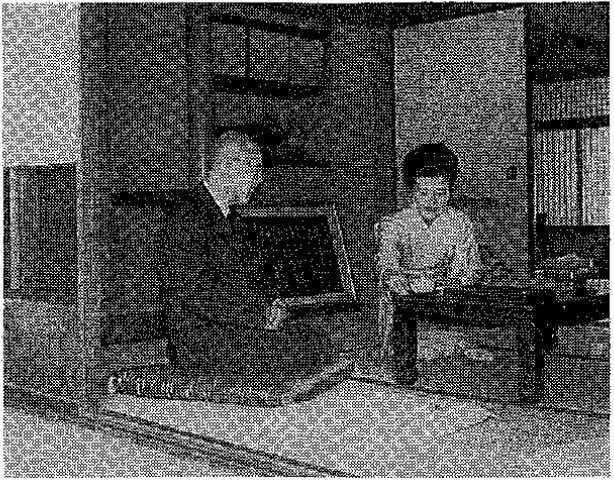
安岡先生が浅見晏斎宮司から
漢詩・漢文の手解きを受けた社務所



令和六年 瓠堂忌 二日目 善根寺春日神社

安岡先生の初学處と浅見晏齋先生

煩惱即菩提・無相と無念



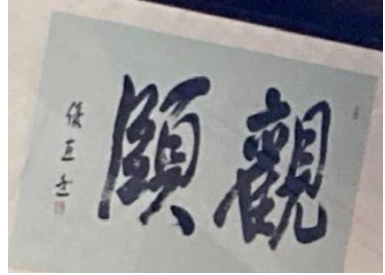
思い出・先生と高松 優巨女史（孔舎衛・春日神社内）

この身、この仏、衆生、身仏衆生、是ら無差別である。この三者は差別がない。この衆生の中に、わが身の中に、この心の中に、その煩惱の中に如来がある。これをよく体現すれば煩惱即菩提であり、即身即仏である。仏を求めようと思ったら吾に徹せよ。心に徹せよ、衆生に徹せよ、煩惱に徹せよ。これを離れて仏を求めてはならない。これを離れて知識や理論に走ってはならない。この世界は本来無相である。すべて一時の化現、或いは仮名有、仮のものである。森羅万象、この本というものは無限の創造であり変化である。少しも住まるといことがない。その意味において無住である。我々が直接経験するような存在というものは一時の相、仮の相であって、本来無相である。千變万化、創造変化してやまないものである。少しも住まるといものないものである。

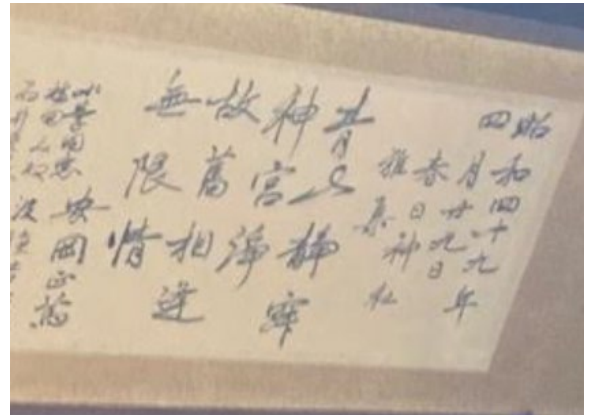
である。無相の中に無限の相がある。従って、天地造化、生そのものに徹すれば、これはそのままに無相である。この仮の存在、束の間の存在、形、そういうものに執着してはいけない。無相に徹しなければならん。そして無住を悟らなければならない。無住が本である。無相が体である。よく無住にして無相に徹したならば、我々はそのままに無限である。だから禅はいかなる宗かといえば、無念宗であり、無相宗であり、無住宗である。いかなる物にも執着しない。いかなる物にも定着しない。そういう相を知らず、住を知らず、念を知らないものを煩惱という。煩惱というのは一つの相である。一つの念である。一つの住である。それに徹すればそういう相を打破し、そういう住を打破し、そういう念を滅却して、よく無相、無住、無念を得る。無念は言い換えれば、それが真如である。如はありのまま、神ながらである。その真如がそのままに人間の心になり、これを直心という。煩惱が直心になればいい、真如になればいい。それは無念であり、無相であり無住である。こういう信念、思想に徹してそのままに行ずる。これを「一行三昧」という。雑行ではなく一行三昧である。この道は何もこの世間を離れて出家する、寺に入るといような必要はない。俗界にあって日々の生活をしながら十分に達せられることである。むしろ俗を去って生活を遊離し、寺に入って煩惱にとらわれて居るならば、却ってそれは道の妨げである。よくこの道を解すれば、何も僧になったり、寺に入ったりする必要はさらさない。在家のままで結構。むしろその方が自然である。正直である。



高松祐吉宮司とお母様（優巨）



高松優巨書 願観（易山雷頤）

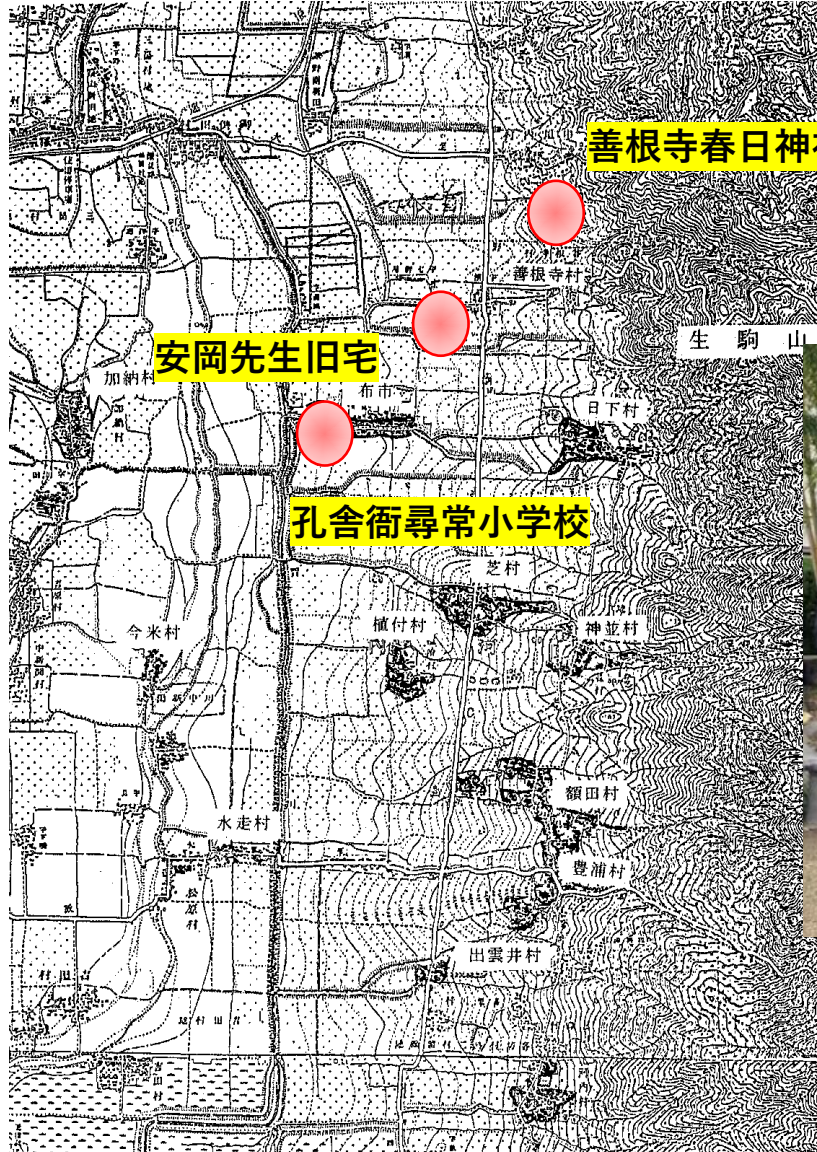


昭和49年に小学校の同級生と訪問

3. 安岡先生旧宅 (安岡先生の少年時代)



四條畷中学校



善根寺春日神社

安岡先生旧宅

孔舎衙尋常小学校

明治十八年地図

帝国陸軍測量部



“俺ら書いた寄書が” (川人)

令和六年 瓢堂忌 二日目
善根寺 安岡先生旧宅

安岡先生の少年時代



ビオスの丘 多目的ホール 於



地元ご出身の福井雅章氏から
のご説明

谷口家所蔵のパネル、軸の
簡易展示あり



善根寺春日神社
浅見晏齋宮司の硯



安岡先生から谷口正明氏への礼状

令和六年 瓠堂忌 二日目
昼食会 ビオスの丘 多目的ホール
社会福祉法人 仁風会の施設を借用

4. 大阪天満宮 (安岡先生と先哲講座)



大阪天満宮で講演される安岡先生
(昭和36年 先哲講座)
「現代と老子」 『関西師友』 28号掲載

大阪天満宮と南野禰宜

安岡先生と寺井種長元宮司の縁



安岡先生と先々代の寺井種長宮司が再会した場所（本殿への回廊の先）

安岡・伊與田教学と大阪天満宮の道縁
安岡正篤先生 ⇔ 先々代寺井種長宮司
伊與田覺先生 ⇒ 寺井種伯前宮司、南野禰宜



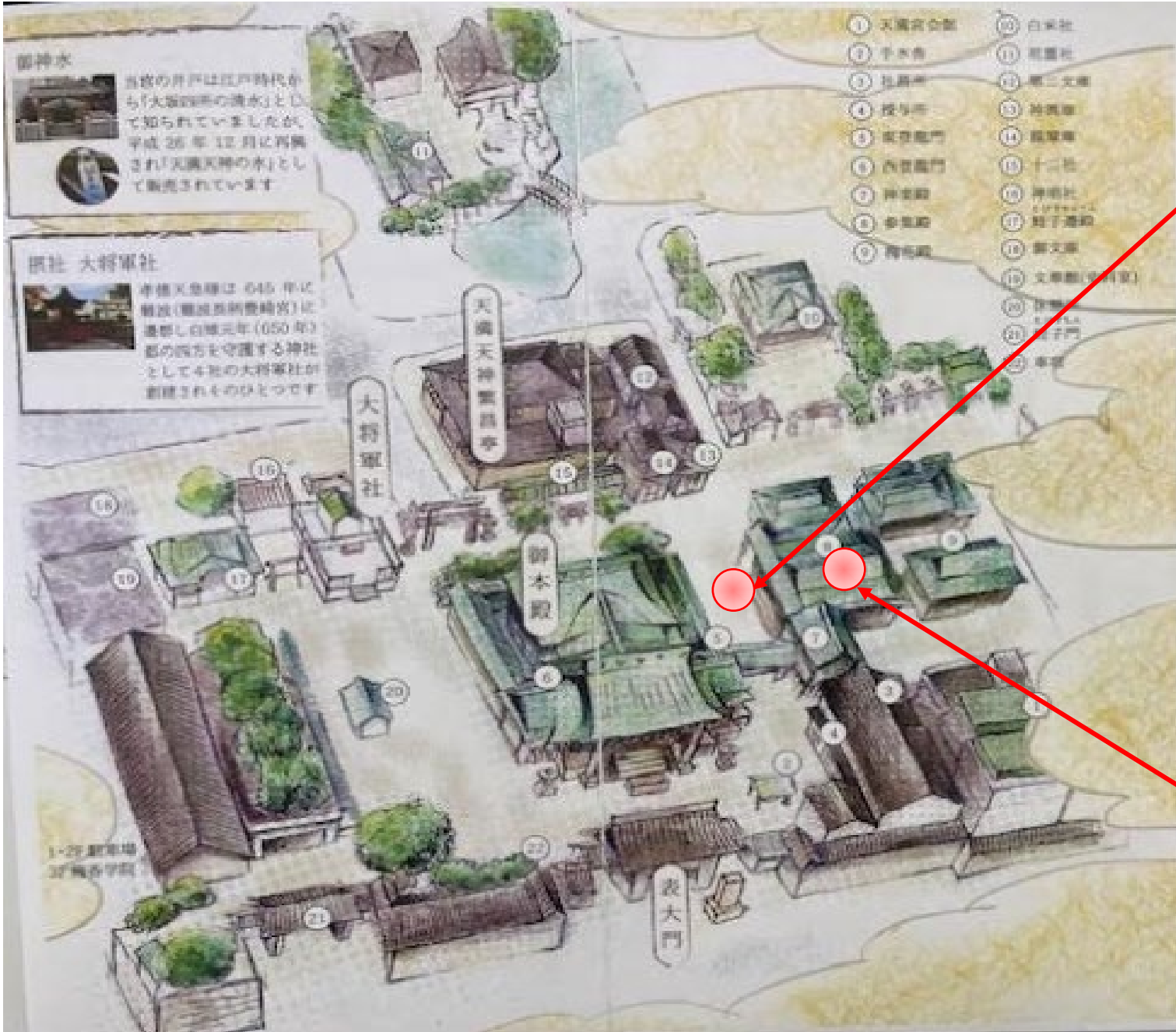
戦後、先哲講座が開かれた
参集殿で南野禰宜の説明を伺う



安岡先生の筆による
天満宮会館の表札



大阪天満宮 俯瞰図



安岡先生と先々代寺井種長宮司が再会した場所（本殿への回廊の先）
四條畷中学剣道部の先輩後輩の仲



大阪天満宮で講演される安岡先生
(昭和36年 先哲講座)

令和六年 瓠堂忌 二日目
大阪天満宮と南野禰宜 ②
安岡先生と寺井種長元宮司の縁